俳諧における「…しかかる」の用法

高羽四郎

動詞の連用形に「懸かる」が直接して、「…しかかる」の形で用いられることがある。それら各種の複合動詞には「かかる」が原義に近い意を示す場合と始発または開始の意を表わす場合とが認められ、仮にそれぞれを

Ⅰ　実義（原義）の用法――例えば「飛びかかる」「通りかかる」など

Ⅱ　補助（開始）の用法――例えば「書きかかる」「知れかかる」など

と呼んでおく。これら二つは同じ一語の用法の違いと考えられ、はたしてそうだとすれば、どういう経過で「懸かる」が開始義に転じたかを不審に思ったことがある。近頃また俳諧の用例を分類し直してみて、この転義は「人を主語に取る一用法」から生じたという推測が強くなった。その点を先ず例題Aで考える。なお時として実義か補助か決めがたい文形に遭遇するので、合わせてこのことにも言及する。

例題A　主語が人（または擬人化せられた生物）である場合

Ⅰ　実義用法

1　方向

雲霧の二百町坂（ハテナシ）にさしかゝり〔付句〕――其角（いつを昔・三四六）

参　とく〳〵と木曾路へかゝる言葉つき〔付句〕――鈴丸（蓑笠下・Ⅴ陽炎九）

行かゝり煤はきてやる庵哉――農日（祚原四・Ⅰ冬句九二）

月寒く来かゝる蜀も膳に付〔付句〕――一顧（十三夜・Ⅹ刈萱一一）

上市へもどりかゝれば初ざくら――米松（よし野紀行・一七二）

白雨〔ゆうだち〕や山伏里に入かゝる――万乎（有磯海・Ⅳ夏句八三）

参　町へ今かゝる嫁入の馬の鈴〔付句〕――里紅（桃首途中・五七）

出かゝりて茶の湯の客を誘ヒ合〔付句〕――石菊（深川・Ⅱ場月二三）

十里はかりの余所へ出かゝり〔付句短〕――里圃（続猿蓑上・Ⅰ雨柳一二）

2　動向

角力取ころひかゝるや女郎花――五明（番橙集・Ⅳ秋句八七）

参　なくさめとなれてかゝる待上臈〔付句〕――如行（小弓・Ⅰ春部一七七）

鎌の刃に飛懸りたるいなごかな――若芝（喪の名残下・Ⅲ秋句三八）

されかゝる猫もうツくし風の萩――琴五（橘立土産・Ⅹ秋句四五）

立かゝり背中をたゝくうちわ哉――口遊（皮籠摺下・Ⅱ夏句九八）

石臼に子も這かゝる五月雨――如楓（住吉物語下・Ⅱ夏部五六）；

のツかゝり酒米かすや夕時雨――車文（茶草子・Ⅰ諸句一二五）
寄かゝる碁盤や秋の夕間くれ――一村（篇突・一八五）
玉あられ押かゝりゐる机かな――才麿（金毘羅会上・Ⅰ冬句七三）
参　竹の子やとれにかゝらふ老の杖――菅詠（三物拾遺上・一九〇）
付記　寝かゝりて遠く成行砧哉――破笠（続虚栗下・Ⅰ秋部九四）

3　志向

しら濱や犬吠かゝるけふの月――丈草（藤実・Ⅰ秋句三五）
理非なしに泣かゝられてむつかしき〔付句〕――雪丸（茶草子・Ⅱ春雨九）
返答によつて死ふといゝかゝり〔付句〕――昨囊（日和山・Ⅲ山雀二五）
老僧の木葉搔んと立かゝり〔付句〕――徐英（法法華経・Ⅰ黄鳥九）
比　立かゝり屏風を倒す女子共〔付句〕――凡兆（猿蓑五・Ⅱ夏月一三）
安産を祝ふて一首詠みかゝり〔付句〕――文里（桜の許し二・三五六）
さあ〳〵と鑑ひ懸ツて稽古鞠〔付句〕――露夕（老旅十一・八一）
かけろふのきほひかゝるや菜園もの――前川（笈日記中・Ⅱ大垣一八）
参　櫻咲〔く〕蕊なりけり雉子の聲――種文（猿舞師・Ⅲ春句四九）
春雨のきほひや草の身つくろひ――可洞（桃首途中・四一一）

4　着手

a　「取りかかる」

とりかゝり土橋の杭を引ぬきて〔付句〕――梅従（六行会上・六七）
参　手吹革にしふ〳〵かゝる朝の月〔付句〕――奉紫（花柑子・四六二）
御公領はおくれて稲に取かゝり〔付句〕――呂風（浪化日記・Ⅲ戊寅二三三）
参　仕事なき身は茶にかゝる朝の月〔付句〕――之道（其便下・五〇四）
月細う脉より戀に取かゝり〔付句〕――乙由（山中集・Ⅲ木犀二九）
参　五器ふいて下女は化粧にかゝりけり〔付句〕――許六（韻塞下・Ⅳ鶏連九）

b　一般動詞

口はやな奴等はめしに喰かゝり〔付句〕――吾仲（柿表紙六・Ⅱ月雪二三）
百足をふみかゝりたる月のくれ〔付句〕――車庸（己光・Ⅰ序部七九）
呑かゝるきせる明よとせかまるゝ〔付句〕――芝柏（枯尾花上・Ⅱ追善四三）
参　汲ミにかゝる柄杓ひかへて水の月――桃肥（乙丑東武墨直・五一六）

Ⅱ　補助用法

1　他動詞＋かかる

打やめて又打かゝる擣衣かな――友硯（珠洲海中・Ⅲ秋句三六）
書かゝる手紙へ直くにけさの雪――社平（世の華二・一二一）
稲妻を算へかゝりてかをへけり〔付句〕――荷汀（小弓・Ⅰ春部二二四）
根わたりや稻かりかゝる今朝の霜――句空（北箱中・Ⅰ秋句三四）
越かゝる川に匂ふや稻の花――東起（曾我上・Ⅲ春句一一七）
役馬もこしらへかゝる小くらかり〔付句〕――蓬十（桜の許し五・五一二）
鳥籠の細工仕かゝる店の月〔付句〕――呂風（浪化日記・Ⅳ己卯八九二）
水風呂の沙汰て頭を剃かゝり〔付句〕――角呂（菅笠上・Ⅰ春部二一）
陽炎や焼かゝりたる風呂の下――般里（杉丸太・Ⅲ春句一〇八）
川口の舟出しかゝる朝の月〔付句〕――香鶴（霜光下・五一）
永き日やむさし野の草擒かゝり――地風（蕉の音・Ⅴ諸句六）
のんてから鎌研かゝる清水かな――観古（浮れ笠・Ⅱ諸句四四）
主従のそはねりかゝる霜夜かな――卯七（初蝶下・Ⅴ冬句五）
鶯や足袋はきかゝる障子越――牧童（草刈笛中・Ⅰ春句一二）
小屏風に茶を挽かゝる寒サ哉――斜嶺（小文庫上・Ⅰ冬句四二／続猿蓑下・Ⅳ冬句一〇七）
うつかりと渡りかゝツて早瀬川〔付句〕――拍夫（桜の許し五・五三六）

2　自動詞＋かかる

せりあふて寝かゝる時や鶯の声――舎羅（鳥道上・三四五）
参　青柳にせりかゝりけり雛葉鳥――素行（小弓・Ⅰ春部一三一）
もゝ尻の来てハセり合火燵哉――十丈（皮籠摺上・Ⅷ冬句一三）
稲妻や寝かゝツた子の顔へ袖――文耕（世の華一・Ⅱ諸句一六〇）

人（及び擬人化せられた生物）について「…しかかる」の用いられている場合を例題Aとし、そのうち「かかる」が原義を示すものをI項に置いた。原義とは言っても、人が物に釣りかかることなどは稀であるから、例文の多くは「方向を持った運動・動作」の類に包括せられる。さらに広く「目標（空間）あるいは目的（心理）への接近」を表わすとすれば、比喩用法をも含めたI項のおよそすべてが覆われる状況である。先ず初めに「一地点への進行」を表わす例文を取って1部に置き、「さしかかる」がその代表例であるから、一文を冒頭に出した。「（雲霧の）はてなし坂に・差しかかり」の「雲霧」は「果てなし」を引き出すための修辞、序言葉の類いと解しておく。そうすると文意は当然「人が坂の入口に近づく」ことになるであろう。ところで自立動詞の「懸かる」にも同種の用法があり、事例の一つを参照に挙げている。引き比べるまでもなく両形は近似しており、「差しかかる」はあたかも「かかる」の強意語の如くである。「差す」は指向の意であるが、同義は既に「かかる」の内に包まれており、かつ「差し―」はしばしば無義化して接頭辞の如く用いられるところから、ここでも形式化して見えるのであろう。続く二例「行きかかり・すす掃きてやる」「来かかる・あまも・ぜんに着く」は文意に何の疑問もないので、関係個所だけを取って一考する。「行き・かかる」「来・かかる」では「行く」「来る」が「差す」より一層鮮明な運動を見せるので、従ってこの部分の働きが初例の場合より強まっている。しかし「かかる」の方には著しい相違が認められず、「接近・到着」の意は変動していない。以上三文で知りえた点は、先行動詞（「かかる」の上に立つ語）の厚薄に係わらず、「かかる」は等しく「目標への接近」を表わし、かつこれは「懸かる」が本来所有する一義だということであった。続く例文ではこの関係が崩れてくる。第四文「上市へもどりかかれば（初桜）」は今日開始の意で通る形、「上市を指して帰路につく」と読み去るところである。しかしこれも既出の三例と同様「接近」を意味し、「帰来上市へ近づいた時」の文辞ではないかと少し疑問である。文中の「初桜」とはむしろその方が自然に結び付くような気がする。終りの二題「出かかる・入りかかる」は現代の口語における典形的な補助の用法、当面の引用文でも行為直前の意に使われているものと考える。しかし発生の当初は両形とも実義で立っていたと臆測せられ、疑えばその余響がここにも全くないと言い切れない。少くとも心象は今日よりやや具象的、方向意識の表明があると感ずるのはただの思いなしであろうか。なおこの種の類形については別途から考査すべき点があり、いまは何の定案もないので、保留しておきたい。以上1部後半の例は実義の用法と見なしがたいのであるけれども、先行動詞が出入・去来を表わす語という文形の点から便宜合わせて言及した。

第2部では手近な物を目標とする動作・行為の類を一括した。なお生物に関する表現でことに顕著な運動が見られるので、その種の例文をも含め、これらを動義の著しいものからやや静義のものへと配列した。動詞の種類は様々であるが、その性格は大同小異、文意もすべて一読自明である。初句と末句とを引いて、「かかる」が実義の用法である点だけを確かめる。最初の「すもう取り・転びかかるや――オミナエシ」は草の上に投げ出された負けずもうのことを

言うのであろう。「かかる」は動義、身を寄せる行為が鮮明である。「懸かる」にも類義の使い方があり、その一つを参考に掲げているが、取り出すまでもないであろう。末尾「押しかかりいる（机）」はこの人の姿、静義になっているけれども意味・機能には何の問題もない。「押す」の働きは軽く、「押しかかる」はそのまま「懸かる」に帰一、参照例もあるが省略する。2部の最後にはさらに例外が挙っているので一言する。「寝かかる」は「眠ろうとする」の慣用語句、俳諧の諸例また同然である。ここの一例も明かな補助の用法であるが、語形そのものは「物に寄り臥す」の実義で成立したと推測せられるので、一応ここで指摘するのみ。あとで改めて考える（参照AⅡ2）。

第3部では「かかる」が次第に抽象的な行為について用いられ、従ってその方向義も段々比喩的になる経過をたどろうとする。初句「（白浜や）犬・ほえかかる（今日の月）」はこれを既出の2部第二例と比較しながら考えて見る。当面の「吠えかかる」は「人に対して」の意と解せられ、それでも主体（犬）と対象（人）との距離が比較句の場合より遠くなっている。もし「月に向って」というのであれば、その間はいよいよ漂々とする。一方「ほえる」は具象行為であるけれども、「飛びかかる（ざれかかる）」ほど顕著な運動を示すものではない。「かかる」は対向の意を表わすにしても、方向は漠然と、目標は間接化している。むしろ主体の意志的な表現、「どこまでもほえ続ける」として反って当たる一面がある。続く「理非なしに・泣きかかられて——難しき」では、「理非なしに」とあるので、「しきりに口説きつく」の意が一層表面化する。ここで口説き手は別に遠い訳でもなく、対向（人を相手に）の意も読み取られる。しかし行為の方が「哀訴」という類の一層無象のものになっているので、「かかる」の方向義も抽象化するのであろう。「対向」の裏に「動意」の響く「かかる」の例は俳諧にも珍しくなく、例題にも類句を一つ付記した。比喩的には物にさえ延用せられ、事例はBⅠの末尾に後出する。なお次句でも考える。「老僧の——木の葉かかんと・立ちかかり」は「立ち向かう」の具象義なのであろうか（動義の用法は2部第三に既出、ここにも一個添付）。それにしても対象は単なる枯葉に過ぎない。ことに本句のような措辞からは「落葉掃きの仕事」に向かう意を判読するのも当然であり、作者もそれを期したことであろう。この辺の用例で方向（空間）が志向（心理）へ移る形勢のあるのが看取せられ、続く例ではそれが明確となる。「（安産を祝うて）一首・読みかかり」では対象が不明であり、対向の意識は極めて薄い。しかし単なる開始用法とは取りにくい形であるから、「進んで喜びの歌を作る」ほどの意志の表現と見る他ない。末題「（さあさあと）競いかかって・稽古鞠」の「競う」は「きおう」の訓、「勢いこむ」の意と解釈する。それが当時の慣用だったと推測せられ、参考資料を例題に付記した。文意を一度そう決めれば、「かかる」は行動意志を表わし、目標は「まり」でなく、「けいこ」であること、もはや疑いないであろう。ところでこの場合は「きおう」の概念に「意図・志向」の意は包まれており、実質「かかる」は「意気ごむ」をさらに強めるほどにしか働いていない。かくて同語は先行動詞を強めるための補助用言に近づくこととなる。以上第3部では「かかる」が心理の作用に援用せら

れて主体の行動意欲を表出し、時には強調の付属語に類することを観察した。次には一歩進んで仕事への着手を表わす例文に入る。

着手の最も常用の形が「取りかかる」であるから、その少数を引いて第4部aとする。初文の「取りかかり・土橋のくいを・引き抜きて」からは文字通り「橋ぐいに手を掛ける」の具象行為がくみ取られる。自立動詞の「懸かる」に関しても類例が挙っているので読み合わせてみたい。「手ふいどに（しぶしぶ）かかる」もまた文義の通り「道具に向って座わる」というのであろう。しかし両句とも背後には「仕事への着手」が予定せられており、それがおのずと表出している。「物に着く」から「事に就く」は僅かな違いであるけれども、ことさらそれを問題にして次例を参照する。「（御公領は）遅れて・稲に・取りかかり」でも「稲に」とあるので、心裏に稲穂や稲田の姿が映るけれども、もう「稲に取り付く」意の文辞ではない。初めから「稲刈り作業への着手」と読むのでなければ、「遅れて」の副詞句が浮きあがることになる。着座が即ち始業を表わす「懸かる」の参照例はここにも挙っているが、事情は前記に同類、対校を省略する。末題「（月細う）脈より恋に・とりかかり」は患者に対する医師の求愛、目標が何といっても無象のことであるから、「とりかかる」もまた抽象義、「実現の用意」くらいと言えよう。この用法はすぐ脇に添えた「懸かる」の一例「けわいに・かかる」と相同、結局は「開始」を意味する表現となっている。かくしてこの両文は後出の補助用法へと極めて接近するのであるが、しかもその間に僅かな段差のあることを次に検討する。

4部bでは「かかる」が「取る」以外の動詞と結んで「着手」の意を表わすような例文を求めた。得たのは少数であるが、「着手→開始」の微細な推移の考察にこれを当てる。最初の「（口早な）やつらは・飯に・食いかかり」も要するに食事を初めたということなのであるが、述部を直ちに「食い初める」と書き替えたのでは、原義に外れ、語法を崩すことになるであろう。「飯に」とあるので「かかる」の実義も残り、「取りつく・食いつく」ほどの意が響くのである（参照「飯を食いかける」）。ここでは「かかる」がなお「対向」あるいは「志向」の意を保っており、それは対象（飯）との関係が失われていないからだと考えられる。逆に言って、「かかる」が純然たる開始用法へ転ずるためには、対象と絶縁して先行動詞（食う）に付属し、一方先行動詞は十分な動義を回復して述語の機能を専行することが条件になるはずと推論せられる。この事情を重ねて次例で考える。「百足を・踏みかかりたる（月の暮）」の「百足」は「ひやくそく」と読んでやはり「ムカデ」を指すこと、多くの辞書が教える通りである（Fiacusocu, mucade『日葡辞書』）。そうすると述部は「辛くも避けて踏みつけなかった」の意ということになる。「かかる」は行為寸前の状態を記すのであるが、その形式化は進んでいる。もともと虫に向う意図はなかったのであるから、対象との関係は切れているはずである。しかし働きは弱い語であるから、自立することなく、僅かに志向・動意の残存によって「踏む」へ従属するに至ったのであろう。一方先行動詞は顕著な動義を見せ、踏むか踏まないかが文の主命題をなしている。およそこうした経過を取って、「かかる」の補助用法は成立したと臆測せられる。最後に開始義の明白な一文を取って観察を重ねておく。「飲みかかる・きせ

る・明けよと（せがまるる）」の「飲みかかる」は「飲みさす・飲み初める」と言うのに何の疑問もない。むしろここでは参照例に見える着手用法との対比を試みる。「くみに・かかる・ひしゃく・控えて（水の月）」の「くみにかかる」は「水くみ仕事に向う」意、作業への志向あるいは着手の義がこの対照例には明白である。「くみ」は本来動名詞、行為の活動よりは仕事の性格を述べる働きが大きい。（参照「眠りが浅い・泳ぎに行く・見積りを出す」。上記の関係個所はそれぞれ「睡眠・水泳・概算」に相当。これら言い替えの語もまた一種の動名詞）。この部分の動義が薄いだけ「かかる」は逆に動義を保っている。もともと実義の少い語であるが、それがここでは動作義で立ち、述部の機能を大きく分担する実状を見せる。これを原句の「かかる」と対比する。観念上では「着手」といい、「開始」といい、その間何ほどの違いもありはしない。しかし文中機能の点では自立（参照句）と付属（原句）の方向へ大きく分かれる跡が看取できる。

小論の初めからこれまで「…しかかる」の例文を方向・動向・志向・着手の四類に分けて観察し、さらに志向→着手→開始の関係を煩わしく検討した。それは意義推移をこの順序で仮定すると、補助用法の展開が平明に理解できると考えたからである。しかし俳諧の実例だけから得た推論、実証は広般な調査に待つべきこと言を要しない。

Ⅱ項には実義を想定しがたい、純然たる開始の用例を取りまとめた。大多数は他動詞と結ぶ形、しかもそれらは性格が奇異なほどに近似している。事例を一括して1部に置き関係動詞の五十音順に並べた。初例を借りて既述の諸点を復唱し、さらに推測を加えておきたい。「打ちやめて・また打ちかかる・きぬた」では「打ちやめる」と対照されているので、「打ちかかる」の表意は文面から自明である。この種の文形でも「かかる」は本来「対象に向う」の実義で成立し、のちに付属語化して「開始義」を派生したであろうとの推測は既に前項末節に記した。かくして「かかる」は文構成の格外に出るわけであるが、そうなると当然先行動詞は単独で対象と結び付くはずである。ところで主体は人であるから、対象はおのずと客体化して、「主体→行為→客体」の関係が成立するであろう。「文」に即してこれを言えば「主語→先行動詞→客語」の関係、当面の一文を代入すれば、「人→動詞→きぬた」の関係ということになるであろう。この場合もし先行動詞が他動詞（例えば「打つ」）であれば、上述の主客関係は最も平易にかつ自然に成立すると想像せられる。知れ切ったようなことを煩雑にくり広げたのは、実は「かかる」の補助用法が当面1部諸例のように他動詞と結ぶ構文で派生したのではないかの臆説を提起したかったからである。例題に挙っている十数例を通覧する。先ず気付く点は動詞の動義がすべて著しいということである。多分この動義の故に対象の客体化、「かかる」の形式化が促されるのであろう。次に注目する点は動詞の種類が多彩ということである。「かかる」の補助用法は他の文形にも出現するのであるが、その場合は動詞の類形が大よそ決まり、用法も固定する傾向のあるのが察知せられる。それと比べて当面の諸例では使用の広範、用法のまことに自由なことを感ずるのである。「かかる」の開始義は他動詞と結ぶ形で展開したというにとどまらず、そ

の形で頻用せられたのではなかろうか。そして補助用法が定着したあと他の文形へも延用せられ、波及したのではあるまいか。

第2部では「自動詞＋かかる」が人について用いられ、開始を表わす類の例文を求めようとした。既にⅠ項1部と2部の末尾では「入り（出）かかる」「寝かかる」の三語を指摘した。諸例多くはこの類形、他には著しい事例に出会わない。人に関してはこの形が異例であり、種類も限られ、用法も固定していたのだと観測せられる。（物に関してはこれと逆に大多数が自動詞、他動詞は格外であることをBⅢで観察する）。かかる事実がまた先の1部における他動詞用法の盛行を裏付けするものと考え、その点を側面から観察するために「寝かかる」の一形を取りあげる。この形は物について用いられた場合、「倒れて・寄りかかる」の実義が慣用、その例はBⅡ1に二個掲出する。人に関する場合は「寝入ろうとする」の補助用法が通則、ここにも事例を二つ掲げた。その初文「せり合うて・寝かかる時や（オシの声）」は開始の意に取って平明、原句もその表現なのであろう。しかし「せりあう」からは「押し合う」の意も判読せられ（その参考文は例題に付記）、そうすると「かかる」にも「身を寄せかける」の実義が響くのかとも感ぜられる。一体「寝かかる」は実義を容れても不可ない語法であり、仮に発生の当時は物におけると同様の表意だったと想定してみる。この場合「かかる」がどう捨象したにしても、そのまま始発義に転ずる経緯は釈然としないのである。むしろ補助用法は別途（例えば前記Ⅱ1）で展開し、それがここにも代入したと見るのが自然な気がする。この問題はまたBⅡで考える。

例題B　主語が物である場合

Ⅰ　接触

落かゝる桐の葉かろしひとへ物――山川（其袋下・Ⅰ秋部七／をだまき・一八）

参　雨に落枝葉にかゝる躑躅かな――白水（紙文夾・一七一）

干網に花ちりかゝるゆふへ哉――芳吹（続東山万句上・Ⅱ諸句七〇）

参　花ちりてあたまにかゝる柳かな――智月（初蟬上・Ⅰ春句三〇）

丹巾〔いかのぼり〕五重の塔に引かゝり〔付句〕――古音（祖翁百回忌四・三五二）

参　木の枝にしはしかゝるやいかのぼり――嵐雪（泊船集六・Ⅰ春句二六／続有磯海上・Ⅱ春句九）

藻の花の流れかゝるや鶴の脛――亀川（桜首途下・一四六）

参　下枝にかゝるあくたや川柳――梅呂（残花集三・四三〇）

川石にまくれかゝりし落葉かな――遊子（柞原集四・Ⅰ冬句二二）

身のうさを髪きれ迚やとけ懸り〔付句〕――舎仙（七さみだれ・Ⅵ簾連一一）

参　切かゝる針に手を引なすひ哉――市中（続有磯海下・Ⅰ雑句三七）

Ⅱ　依拠

1　依拠の支点が提示せられている場合

ねり屏のころひかゝるや花おうち――白雪（往暦上・Ⅴ五月七七）

児〔ちご〕の手にもたれかゝるや女郎花――木口（百花集・Ⅵ秋句一二二）

道中へ寝かゝる雨の薄かな――柳陰（百里鶯二・三七二）

川越しに寝かゝる竹や夜の雪――洞仙（老旅十二・九〇）

まいら戸に蔦這かゝる宵の月〔付句〕――芭蕉（猿蓑五・Ⅰ時鳥五）

さゝ垣にあからみかゝるからす瓜〔付句〕――陽和（芳門句牒・Ⅲ桜狩九）

虚栗毛やすへりかゝりて霜の竹――臨川（東西夜話中・二四〇）

蝶つかひはなれかゝりし金屏風〔付句〕――東明（住吉物語下・Ⅱ夏部一三七）

2　支点の明示がない場合

こけかゝる垣に壱本鶏頭かな――溪宇（世の華三・一〇三）

蕣のしほみ懸るや星の宿――あきく女（木曾谷・Ⅵ秋句二二）
崩れかゝる案山子や秋の姿とも――文先（残花集五・五四三）
玉かきも風かあたつて破かゝり〔付句〕――玄梅（鳥道下・Ⅶ順礼一三）
何故にうつむきかゝる草のはな――雲甫（西雲上・Ⅱ悼句四）
　参　萍〔うきくさ〕もうつむゐて咲く暑さ哉――梅枝（老旅十一・三七一）
水仙のほつれかゝるや朝あらし――斜嶺（笈日記中・Ⅱ大垣四二）
　参　氷凝解（イテ）にほつれて咲や蕗の花――米巒（韻塞上・Ⅳ正月二六）
仮橋も崩れかゝるやぬるみ川――靈踏（花霞一・三一一）
　参　仮橋の俄にかゝる小鷹狩〔付句〕――支考（白陀羅尼・Ⅳ森花六三）

3　「咲きかかる」

萍や鍬洗ふ手に咲かゝり――二石（百花集・Ⅳ夏句一〇九）
鴎の巣に咲かゝりけり藤の花――一琴（千網集三・春句三五）
半分ハ閨へ花の咲かゝり〔付句〕――霜鳥（長良川・Ⅰ春連一一）
咲かゝる藤の曇りや井戸の上――白獅（陸奥千鳥一・Ⅵ春句七一）
見て通る紀三井は花の咲かゝり〔付句〕――芭蕉（続猿蓑上・Ⅳ松露一七）
嶺の月岨にハ花のさきかゝり〔付句〕――風国（初蟬下・Ⅲ秋風一七）
咲かゝる花に小壁をぬり継て〔付句〕――句空（草庵集詩・Ⅱ夏部八六）
師走ともいわせす梅の咲かゝり〔付句〕――孤松（一七九一　続東山万句下・二七）
夕かほのほちり〳〵と咲かゝり〔付句〕――蔵六（一八二三　花鳥目付集・一八三）

Ⅲ　補助用法

書院から賣て勝手もうれ懸り〔付句〕――景芳（幾人水主・Ⅴ女郎花三一）
肝心のところて夢は覚かゝり〔付句〕――支園（己巳東武墨直・八七）
翁鷹〔それたか〕の行衛もとふか〔どうか〕しれかゝり〔付句〕――如桂（残花集七・二一）
　御詮儀ハ傘の名に知れかゝり〔付句〕――山隣（獅子物狂上・Ⅰ梅花二三）
澄かゝる影や濁して飛ふ蛙――梅隣（世の華三・二〇一）
縋れたる公事の糸口立かゝり〔付句〕――雪丁（残花集十・二六四）
取れかゝる酒の若やく花柚哉――甕哉（百花集・Ⅳ夏句六）
　比　暖な日にとりかゝる普請事〔付句〕――五明（芳門句牒・Ⅴ水鶏二三）
おのつから石は佛になりかゝり〔付句〕――正秀（鳥道下・Ⅴ川せみ二九）
　大方に直の成かゝる明日の花〔付句〕――盛名（土佐土産・Ⅳきぬた三五）
嘘ついていたれハ留主のはげかゝり〔付句〕――宜考（桃首途中・二二五）
やゝ更て月の夜店も引ケかゝり〔付句〕――冠子（花霞集三・四一）
　比　小屏風に茶を挽かゝる寒サ哉（既出AⅡ1第十五）
幸ひと素麺も今ゆてかゝり〔付句〕――琴風（父の道・Ⅳ蓮連一五）
　比　陽炎や焼かゝりたる風呂の下（既出AⅡ1第九）
三井寺や倶舎よめかゝる梅の花――許六（草刈笛中・Ⅰ春句五）
　比　書かゝる手紙へ直くにけさの雪（既出AⅡ1第二）

例題Bでは物について「…しかかる」の用いられた例を取り集めた。既に擬人化の生物はAへ含めてしまったので、残るところは多くが自然現象に関する記述である。表現の類形も少数にとどまり、分類はことさら簡素にした。さらに「…しかかる」の一般的な性格はAで観察済み、説明の重複はできるだけ避ける。ただ人の場合は能動行為、ここでは被動現象が主となるので、その点に多少の相違が指摘せられる。ことに実義か補助か判然としない例文を多く散見するのも、物に関する被動現象ということが原因すると考えられる。実義か補助かの問題を中心に例文の概括的な通覧を試みる。

Ⅰ項では「方向を示す運動」の比較的鮮明に見える一群を掲げた。意義・用法に注意すべきものは何もない。初出の類形ということで一顧しておく。冒頭の二題「落ちかかる」「散りかかる」は原

義通りの用法であり、それは参考に添えた「落ち（散りて）…懸かる」と照らし合わせて明白である。単に「かかる」が動義を示すというばかりではない、文中の働きが先行動詞（落ちる・散る）に比べて劣らず、互いに述部を分けあう形勢である。続く三例では前後二動詞間の比重に微かな増減の差が認められるけれども、「かかる」の動義には格別の変化も見えない。吟味は省略して、末例へ移る。「（身の憂さを）髪・切れとてや――解けかかり」とは出家をさえ思う女の人の心境を述べるのであろう。情意はよく伝わる表現であるが、さて「解けかかる」は何の用法であろうか。「解けそうになる」は分明であるが、「肩に垂れる」は印象に切である。あるいは髪を主動者とする志向の文辞、「この人への催促」を表わすかとも疑われる（物に関する動意の一例を例題に並記、人については A I 3 参照）。表意の揺れる形が早くもここに見られ、著しいものを次項の2と3とで観察する。

第Ⅱ項では「倒れかかる」の類形を大きく取り、その1部には特に支点（寄りかかるべき物や場所）の明記せられているものを選んだ。この場合は具象的な「寄留・依存」の意が固定し易く、事実引用文の多くが今日そう読んで疑うことをしない形と考えるので、これらも個別の指摘を省略する。最後の二文には不審が打たれるので、それらを対照させておく。「からいがや・すべりかかりて（霜の竹）」「ちょうつがい・離れかかりし（金びょうぶ）」はよく似た文形、ことにこんな表記法で示されると、両者はいよいよ相似、その上思いようでは実義と補助の何れにも判読できそうである。不分明な表現なのではあるが、試みに例題へ帰って卒然と原文を読み流してみる。そうすると前者は実義（引っかかっている）、後者は補助（離れそうである）へ文意の傾くのが感ぜられる。前文は「クリのいが」に関する描写、「竹」をその支点と見るので、「かかる」の具象義も残ることになるのであろう。これに対して後文の「ちょうつがい」は単なる付属品、「金びょうぶ」についての記述と見えるところから、述部も「留め金の離ればなれな」という類の説明句として読まれるのであろう。こう解すると、「びょうぶ」はもはや支点でない。一度拠点の明示が欠けると、表意はにわかに疑わしくなるのであり、その間の事情を次に観察する。

第2部の初め二句「こけかかる・かき」「朝顔の・しぼみかかる」においてはなお「傾いて立つまがき」「花がしおれて付く」の実義が判読せられ、「こけそうな」「しぼみ初める」の始発義は全文の大意から見て薄弱なのである。場所は直接提示されなくても、自明のこととして理解されている。しかしこの点の規定が一度省かれると、こんどは「かかる」の用法が不分明になるのもまた事実である。続く二題「崩れかかる・かかし」「玉がきも（風が当って）やれかかり」は先の二形と類似する表現であるのに、「かかる」の意味は決し難い。当時は実義が優勢だったとすればそうとも見え、今日通りの用法だったとすれば始発の意とも解せられる。残る三文はもう補助の用法と決めておくのが簡明である。一時は筆者の懐疑が過ぎて、この類形をさえ具象義かと迷ったことがある。煩わしく加えた参照句はその頃集めた実義の資料であり、いまは不要の感も起るが、一応存置する。以上2部諸例の始発用法については付言したい一事があり、それは次の部へ入って合わせて提起する。

第3部では数多い「咲きかかる」の例文から一部を抄出し、実義の比較的明白なものから、始発義のほぼ疑いないものへと配列した。結果は前記2部の場合と同じことになるのであるが、重複を厭わず一巡しておく。最初の二題「浮草や・くわ洗う手に・咲きかかり」「トビの巣に・咲きかかりけり・フジの花」では拠点（手）、接点（巣）が示されてあり、「かかる」の実義（依存・接触）はまず疑えない。ことに第三文「半分は・うるうへ・花の・咲きかかり」はさらに明確、「かかる」は無象の事について使われているが、「到達・接続」の意は反って固い。続く四題は元禄年間の作例、実義とも補助ともその混在とも見え、まことに判然としない。「花が開く」は隠やかであるが、「花が懸かる」は鮮明である。何れにしても文意は小差、ただ原句の表現が実義であれば、読みもそれに従うべきを思うのみ。最後の二例は後期の俳書に得たものであり、文義からして始発義は明らかと言える。今日「咲きかかる」は大よそ開花の意、他義は殆んど問題にならない（参照「咲いて・懸かる」）。一体「咲く」と言えば、花が枝や柄にあるのは知れきったこと、「咲いて懸かる」は理の上からは重言に類する。この形で「かかる」の形式化するのは当然の勢いだったと見られ、事実補助用法は早く形成せられたのだとも想像せられる。この事情は2部の一群例えば「崩れかかる」についても同様のはずである。ところで「咲き（崩れ）――懸かる」はどう形式化したにしても、直接始発義へ転じたとは受け取りがたいのである。開始義は別種の文形で一層自然な経過を取って展開し、それがここへも延用せられたとする推測の隠当を思うのである。「かかる」は人に関する他動用法で補助用言化したというAⅡの臆説をここにも再提したい。

第Ⅲ項には実義を拒否して容れない、明確な補助の例文を取り、関係動詞の五十音順に並べた。諸文の性格は単一、先行動詞がすべて被動義または自発義の自動詞であり、多くは無形の現象を表わすに用いられている。人が主語である場合は大多数が他動詞であり、その動義が鮮明であることをAⅡで観察した。いま両項の例文を個々に見比べる。思えば自然なことのようでもあるが、対照の異を奇と感ずる。類義の動詞に関する例を少数AからBへ引き写した。当面の例文後半に「比」として挙げたのがそれである。さらにここへ引き直すことは避けて、別の一組を掲げる。

雲の樽崩れかゝるや一時雨――一風（渭江話五・三二一）
見るうちに崩しかゝるや雲の峯――李朝（桜の許し五・一四六）

述べる現象は同じであるが、語法は違っている。前者は「雲」の描写、「崩れる」は一種の自発義、「かかる」は補助の用法であるけれども、「空に懸かる」の原義が疑われる。後者は超人称構文（impersonal construction）の一例、ある種の未知の主体を意識（あるいは潜在的に意識）して、それを主語に取る表現としておきたい。「崩す」は顕著な能動行為、「かかる」に対向の意は潜むとしても始発義は揺がない。

古俳書翻刻本のうち例文を借用した書目を付記する。
古俳書文庫――よし野紀行
竹冷文庫――続有磯海
蕉門珍書百種――柿表紙・番樫集・杉丸太・青毬・俳諧曾我
俳書集覧――己が光・其便・猿舞師・木曾の谷

俳書大系――藤の実・幾人水主
古板俳諧七部集――猿蓑・続猿蓑
加越能古俳書大観――西の雲・柞原・喪の名残・北之箱・霜の光・千網集
俳書双刊――浪化日記・鳥の道・住吉物語・蓑笠・金毘羅会
庵日記・横日記――芳門句牒
元禄江戸俳書集――紙文夾

なお『柱暦』『茶の草子』『小弓俳諧集』については藤園堂所蔵本と対校しておいた本文を用い、『草庵集』『山中集』『日和山』の三書は愛知県立大学蔵本の写真による複写を利用することができた。何れも特別の好意によるものであり、恩を記して拝謝。